《文壇花絮》

張依吾＝伊吾？

― 駱賓基と魯迅、交信の謎 ―

平石淑子

「辺陲線上」は駱賓基の最初の長編であり、文壇へのデビュー作でもある。1936年ハルビンを脱出して単身上海に出た彼は、蕭軍・蕭紅の例にならい魯迅の力を借りて文壇に登ろうとした。しかしそれは魯迅の死によって果たせず、「辺陲線上」は結局茅盾の手を経て、1939年文化生活出版社から出版されることになる。

北平で北京大学のモグリの聴講生として一年を過ごした後、ハルビン精華学院の国文の補助教員となった彼は、雑誌〈芸蕾〉の編集を通して蕭軍・蕭紅と親交のあった金剣嘯と知り合い、同郷の蕭軍・蕭紅夫妻の作品が既に魯迅の手にあり出版を待っているということを聞いていた。彼が上海に行く決心をしたのもそのことが念頭にあったからだが、上海に着いた時二人はたまたま上海には不在であったため、彼は直接魯迅に手紙を書くのである（「関于我和魯迅先生的両次通信」[1]）。最初の手紙は1936年７月10日に魯迅の手元に届いた。

７月10日、張依吾の手紙並びに原稿を受け取りすぐ送り返す。（魯迅日記）

“原稿”というのは「辺陲線上」の一部で、それは未完成だったが、魯迅がもしよい返事をくれれば執筆を続けるし、もしだめなら新聞の求人広告などで生活の道を探そうという、一か八か自分の運命を賭けてみる気持ちであった。しかし彼が受け取った魯迅の返事は、“長編小説は全部を読まなければならず、最初の数章では何とも言えない。自分は今病中にあり、原稿を読むことはできないから、病気が少し良くなり、君の長編小説が完成したら、もう一度見せて下さい。”というものであった（「関于我和魯迅先生的両次通信」）。

魯迅日記に張依吾の名前が再び登場するのは８月５日である。

８月５日、依吾の手紙を受け取る。

駱賓基によれば、手紙の内容は７月10日付の魯迅の手紙と原稿を受け取ったこと、長編は完成させる決意であるから後日見ていただきたい、ということであったから、返信はなかったのだという（「与茅盾先生第一次見面的前後」[2]）。

魯迅日記に次に張依吾の名前が登場するのは９月17日と18日である。

９月17日、午前張依吾の手紙を受け取る。
９月18日、張依吾に返事を書く。

これについて駱賓基はこう解説している。

> これはちょうど私の長編が近く脱稿しようという時で、再び魯迅先生に見て頂くために、先生の病状を伺い、原稿を見て頂けるところまで回復されたかどうかを尋ねるものであった。ところが先生の返事は明らかに夫人の許広平先生の代筆で、端正な文字はブルーの万年筆で書かれていた。それによれば、今は病中で、しばらくは原稿を読むことができないというのだった。（「与茅盾先生第一次見面的前後」）

魯迅の死はその一ヶ月後、一方「辺陲線上」の脱稿は同年冬を待たなければならなかった。

魯迅との交信について、駱賓基は“上海到着後、張依吾の名前だけを用いて魯迅に二通手紙を書いた”（「作者自伝」[3]）といっているが、実際には三通の手紙が存在したことが、魯迅日記及び彼自身の回想から確認された事になる。

しかしながら、魯迅関係の研究資料では、駱賓基はこの他に更に二通の魯迅宛の手紙を書いたことになっているようである。

1981年版魯迅全集の索引によれば、駱賓基と魯迅の交信として、前述の７月10日、８月５日、９月17、18日に、更に９月６日（伊吾→魯迅）、14日（魯迅→伊吾）、21日（伊吾→魯迅）を加えている。しかしこの“伊吾＝駱賓基”という解釈に関して、駱賓基自身は異議を唱えている。彼はかつて復旦大学「魯迅日記」注釈組から“張依吾”に関して質問状を受けたことがあるが[4]、それに以下のように答えている。

> 張依吾は私が当時用いた仮名であり、魯迅先生に手紙を書くときに初めて用いただけのもので、以後は全く使っていない。“伊吾”は別の人で、私はそれが誰であるか知らない。（中略）前後する（魯迅の）二通の手紙（7.10、9.18）は大上海保衛の急行軍に参加する間に、前線を急いで前進する途中で紛失してしまった。だから私の記憶の中では、前後して二回手紙をやりとりしただけで、８月５日の一通は記憶が定かでない[5]。この他に

別の“伊吾”とのやりとりがあったのである。

（「関于我和魯迅先生的兩次通信」）

では“伊吾”は誰なのか？手近の筆名辞典などに見あたらない“伊吾”について、考えられる可能性は以下の四点である。

(1)世間に名の知れた人物が故意に名前を伏せた。

(2)駱賓基とは無関係の全く無名の人物

(3)駱賓基に近い人物が、紛らわしい名前を使って魯迅と交信しようとした。そして人間の記憶とはあてにならないものであるから、なお

(4)駱賓基自身

という可能性も残しておこう。この場合は彼の記憶違いという可能性と、魯迅が“依吾”を“伊吾”と書き違えたという二通りの可能性が考えられる。

(1)の場合、魯迅と交信することが己れの不利になるような人物、魯迅との交際を公けにしたくない人物がいたとしたらおもしろい。が、仮にそういう人物がいたとしても、永遠に明らかにはなるまい。

(2)の場合、その人物が後に名を成していれば、何かの機会に明らかになる可能性も残されていないわけではないが、そうでない場合はこれも永遠に明らかになりようがない。

残るは(3)(4)の場合であるが、“伊吾”について、「魯迅和駱賓基」（馬蹄疾）[6]は、『魯迅先生紀念集』[7]の“函電”欄に“一人の外郷青年”のものとして“伊吾”と署名されたものがあることを指摘する。

> ……上海に流浪してきて四ヶ月余りになるというのに、葬儀場の場所もよくわかりません（膠州路がどこにあるかわかりません）。御遺体に最後のお別れができないのが大変残念です。伊吾、合掌。

そして駱賓基が上海に出てきた時期（５月）から推して、この“函電”は“伊吾”が駱賓基である動かぬ証拠であるとする。だが、上海に来てもう四ヶ月もたっているのである。しかも魯迅の葬儀は当時の一大イベントであった。内山完造は当時の事を次のように記録している。

> 私はすぐ新聞、雑誌の各社に、先生逝去のニュースを伝えた。二十日、各紙は、「文星落つ」の見出しで、魯迅先生の逝去をトップで報道した。
>
> 全中国の青年は、先生の逝去に接し嘆き悲しんだ。遺体は膠州路の万国殯儀館に移され、二十二日の出棺まで、弔問の列は絶えることがなかった。

午後二時に出棺したが、政府官員や官僚といった人間の送葬はなかった。六千人にのぼる青年男女、同志たちが、厳粛にかつ敬虔に、万国公墓まで送葬した。沿道の両側には工部局派遣の騎馬隊が“警戒”にあたり、童子軍（ボーイスカウト）が交通整理にあたったので、何の問題も起こらなかった。（「魯迅先生を思う」[8]）

膠州路にしろ葬儀場にしろ、調べればすぐにわかることだ。しかもこれだけの大々的な葬儀で、遺体はほぼまる三日間、万国殯儀館に安置されていたのである。“伊吾”は本当に上海にいたのだろうか。

“函電”及び魯迅の葬儀に参列したか否かは駱賓基本人に尋ねればすぐに明らかになることであるから、確認するつもりである。来日中の彼の令嬢張小新女士に尋ねたところ、参列しているはずだ、と言っていた。更に駱賓基は一度だけ魯迅に会ったことがある、とも話してくれた。いや、正確には見たことがある、と言わなければならない。それはある木刻展の会場であった。そこで彼は魯迅の姿を見かけたのである。その時既に彼は魯迅と手紙を交わしていた。“旧知”の間柄であったにも係わらず、彼には魯迅に声をかける勇気がなかった。緊張して魯迅の姿を遠くに見ているだけだった、という。

この“函電”の存在も、伊吾＝駱賓基の決定的な証拠ではない。それどころかむしろ、伊吾＝駱賓基を否定する証拠であるようにすら見える。

最後に残った(3)の可能性を考えてみよう。

駱賓基には、同じ世界観を持ち、同じ理想と興味を持つ同郷の親友がいた。名前を張棣庚という[9]。二人はハルビンで共に〈芸蕾〉を編集し、官憲に追われて逃亡、その日の内にハルビンの八大市に身を隠した後、各々ハルビンを脱出して後に上海で再会している。魯迅の死後、「辺陲線上」を完成させた駱賓基は、その原稿を茅盾に送るが、当時同居していた張もそれと前後して自作を送っている。二人は魯迅の死によって一旦は断たれたかに見えた未来への希望を、もう一度茅盾に賭けたのである。待ち望んでいた返事がきた！それは駱賓基に宛てたものであったが張は委細構わず、それを奪い取るようにして“上に行こう、俺が読む！”と興奮して叫ぶ。

我々は飛ぶように二階に駆け上がった。しかしD（張）はなおも私に渡そうとはせず、体を捻りながらとうとう自分で封を切り、一人で読み始めた。何も言わずに！読んでいくうち、彼の顔色がみるみるうちに変わり、魂が抜けたようになり、とうとうバッタリとベッドに倒れ込んでし

まった。手紙はヒラヒラと床に落ちた。私はそれを拾って、読んだ。茅盾先生は私を大いに励ましてくれたが、それは作品自体に対してではなく ― 私ははっきりと覚えているが ― 私の描写の“雰囲気”に対して私の筆力と未来を予感するというものであった。それは何と大きな励ましであったろう！それは私の未来に対する予言と大きな期待であり、こうして私の一生は定められ、文学創作に一生を捧げることになったのである。手紙の終わりに私の親友について触れてあった。彼には一定の文学的造詣はあるが、生活の息吹に乏しく、概念化したところがあると指摘し、彼が自分自身の生活の中で熟知しているものの中から素材を磨いていくことを希望するとあった。私の長編は出版の紹介をしようと思うが、親友の原稿は、私と会う時に取りに来るようにとあった。

（「与茅盾先生第一次見面的前後」）

駱賓基は上海で蕭軍の訪問を受けるが、それはそもそも張が蕭軍に手紙を書いたからであった。彼は相当に積極的な、文学的野心に富んだ青年であったように見える。張が上海に出てきたのは、1936年初冬の事であった（「六十自述」[10]）。魯迅は既に亡かったが、それ以前に駱賓基と魯迅との交信を知っていた可能性が無いわけではない。(3)の可能性を疑えば、その最短距離にいるのは張である。ただ、そうだとすれば、張はなぜ“伊吾”と言う見るからに紛らわしい名前を使って魯迅と交信しようとしたのだろうか。

駱賓基のみならず、文学を志す者にとって、魯迅と親交があったということは誇りでこそあれ、隠すような事であったはずがない。しかも『魯迅日記』を見る限りでは“伊吾”との交信の中に、人に知られては困るようなことがあったとも思えない。だからこそ駱賓基が“伊吾”は自分ではない、と強調するのは、単なる記憶違いといった程度のものではないように思うが、魯迅が死に、証拠となる書簡も失われた今となっては、勝手な推測で人を傷つけまいとすれば、“伊吾”は駱賓基の記憶違い、あるいは魯迅の書き間違いとしておくのが穏当といったところなのだろうか。

【注】

1、1978.1.29　『書簡・序跋・雑記』（1986.12　青海人民出版社）

2、『書簡・序跋・雑記』

3、1979　『初春集』（1982.10　江西人民出版社）

4、“1936年の「魯迅日記」中、“張依吾”という名前は七度の多きにわたって見えるが、そもそも皆これが誰であるかを知らなかった。蒋錫金氏の指摘により、張依吾は作家駱賓基氏であることを知り、我々は彼に彼自身の事と魯迅との交際の状況を尋ねたのである。”

（〈魯迅研究資料〉7　1980.12　天津人民出版社）

5、これについては既に記したように、「与茅盾先生第一次見面的前後」に解説がある。

6、『魯迅和他的同時代人』（1985.7　春風文芸出版社）

7、1937.10　上海文化生活出版社、1979.12　上海書店より復印

8、『魯迅の思い出』（1979.9　社会思想社）

9、張棣虎（1914.3.1～1957.12.14）現代劇作家。本名張魁祥、筆名狄耕、陸蒼、紀中、莫東。山東省掖県に生まれ、吉林省琿春県で育つ。北京匯文中学で学んだ後、ハルピンで教壇に立つ。1938年山西で遊撃隊に加わり、翌年末延安に行き、魯迅芸術学院文学系に学ぶ。1946年入党。陝西省文聯副主席などを歴任。

（『中国文学家辞典』現代第三分冊　1985.3　四川文芸出版社）

10、1977.10　『駱賓基短編小説選』（1980.5　人民文学出版社）

(22ページよりつづく)

ろう。（実際は彼女の送迎に必ず車がつくのだとしても。）この日はひどい雨降りだったが、茹氏は昼食をはさんで、五時間を費やして下さった。三カ月程前に胆嚢の手術をされたとのことで、そのためかまた多忙のためか、以前の写真よりも痩せたように見受けられた。氏は煙草をくゆらしながら笑顔ではつらつと話す。時々、冷えすぎる冷房を自分で調節し、窓を閉めたり食事の手配をしたりしながら。以前李子雲が「英気」と評したのが頭に浮かんだが、この言葉の中には気さくさも含まれるのだろうか。午後も続けられることになって彼女が用意して下さったのは、作協の食堂の昼食である。「外で食事しようかと考えたけれど、せっかくの機会だから、こういうところの食事を味わってみるのもいいでしょう？」と彼女は言う。私が若いせいもあろうし、留学生の食生活をご存じないためもあるだろうが、この言葉は、「作家は庶民の暮らしから離れてはいけない」とする信条の延長線上にあるように思われた。そして「飯盆」に盛られた昼食をたいらげて、インタビューは続いたのだった。